丹前立髪

多く卷て、卷鬢とて鬢の毛を下より上へかきあげ、月代のきはにて卷こみてゆひたり、

〔屠龍工隨筆〕今歌舞妓狂言にする、丹前立髪六方は、其比丹後殿前の風呂屋へ通ふ若侍どもの、病氣分にして引籠居たるが、長髪にてかしこへ通ひたるが、ふと伊達に見えければ、月代剃て能人も、皆長髪にてかよひしより發りしとなり、夫等が大小の貫木ざしにさして、大道をせましと振かけて歩みけるより、立髪丹前などいひしなり、六方は彼長き大小と、兩の腕と六方へふりわくるといふ心なるべし、

散切

〔書言字考節用集五肢體〕殘截（ザンギリ）

〔倭訓栞中編九〕ざんぎり　今東都の花子（コウジキ）は皆此風俗也、殘截の義成べし、列子に、南國之人祝髪而裸、注に、孔安國注尚書云、祝者斷截其髪也とみゆ、されば祝髪は髪をきる事也、今剃髪の事とするは非也といへり、

〔松屋筆記六十六〕散切（ザンギリ）髪

散切といへるは、寛永の比の書に見えて、今も云かいへり、通鑑綱目冊三百卅三丁ウ　唐玄宗開元廿七年の條に、采收散髪之民數万云々とあり、

ナヅ髪

〔古今著聞集十七變化〕仁治三年大嘗會に人多く參りつどひけるに、外記廳のうちひがしのかたなるもみの木のこずゑに、かみをづかみなる法師一人ふしたりけり、

〔宇治拾遺物語一〕これも今はむかし、丹波國篠村といふところに、年比平茸やるかたもなくおほかりけり、里村のものこれをとりて、人にもこゝろざし、またわれもくひなどしてとしごろすぐるほどに、そのさとにとりてむねとあるものゝゆめに、かしらおづかみなる法師どもの、二三十人ばかりいできて、申べきことゝいひければ、いかなるひとぞととふに、〇下略

月代

〔倭訓栞前編佐十〕さかやき　太平記に、月額をよめり、さかやきの跡青いと見ゆ、今の額に角入る事